

森
鷗
外

杯



杯

温泉宿から鼓つづみが滝たきへ登って行く途中に、清冽せいれつな泉が湧き出ている。

水は井桁いげたの上に凸面とつめんをなして、盛り上げたようになつて、余ったのは四方へ流れ落ちるのである。

青い美しい苔こけが井桁いげたの外を掩おおうている。

夏の朝である。

泉を繞めぐる木々の梢こずえには、今まで立ち籠こめていた靄もやが、まだちぎれちぎれになつて残っている。

万斛ばんこくの玉を転ころばすような音をさせて流れている谷川に沿うて登る小道を、温泉宿の方から数人の人が登って来るらしい。

賑にぎやかに話しながら近づいて来る。

小鳥が群さえずがって囀さえずるような声である。

皆子供に違ちがない。女の子に違ちがない。

「早くいらっしやいよ。いつでもあなたは遅れるのね。
早くよ」

「待まちっていていらっしやいよ。石がごろごろごろして歩いて歩あきに
くいのですもの」

後おくれ先立つ娘の子の、同じような洗髪を結んだ、真赤な、幅の広いリボンが、ひらひらと蝶ちようが群れて飛ぶように見えて来る。

これもお揃そろいの、藍あいろ色の勝った湯帷子ゆかたの袖そでが翻ひるがえる。足に穿はいているのも、お揃そろいの、赤い端緒はなの草履である。

「わたし一番よ」

「あら。ずるいわ」

先を争うて泉の傍そばに寄る。七人である。

年は皆十一二位に見える。きようだいにしては、余り粒が揃っている。皆美しく、稍やや々ややなまめかしい。お友達

であろう。

この七顆かの珊瑚さんごの珠たまを貫くのは何の緒か。誰たれが連れて温泉宿には来ているのだらう。

漂う白雲の間を漏れて、木々の梢を今一度漏れて、朝日の光が荒い縞しまのように泉の畔ほとりに差す。

真赤なりボンの幾つかが燃える。

娘の一人が口に銜ふくんでいる丹波酸漿たんばほおずきを膨ふくらませて出して、泉の真中に投げた。

凸面をなして、盛り上げたようになっていゝる水の上に投げた。

酸漿は二三度くるくると廻って、井桁の外へ流れ落ちた。

「あら。直ぐにおっこつてしまふのね。わたしどうなるかと思つて、楽しみにして遣やつて見たのだわ」

「そりやあおっこちるわ」

「おっこちるといふことが前から分つていて」

「分つていてよ」

「嘘うそばっかし」

打つ真似をする。藍染の湯帷子の袖が翻る。

「早く飲みましょう」

「そうそう。飲みに来たのだったわ」

「忘れていたの」

「ええ」

「まあ、いやだ」

手ん手にふところ懐さぐを搜さぐって杯を取り出した。

青白い光が七本の手から流れる。

皆銀の杯である。大きな銀の杯である。

日が丁度一ぱいに差して来て、七つの杯はいよいよかがや耀かがやく。七条の銀の蛇へびが泉を繞はしって奔はしる。

銀の杯はお揃で、どれにも二字の銘がある。

それは自然の二字である。

妙な字体で書いてある。何かよりどころ 扱ががあつて書いたものか。それとも独創の文字か。

かわるがわる泉を汲くんで飲む。

濃い紅の唇くちびるを尖とがらせ、桃色の頬ほおを膨らませて飲むのである。

木立のところどころで、じいじいという声がする。蝉せみが声を試みるのである。

白い雲が散ってしまつて、日盛りになつたら、山をゆるする声になるのであろう。

この時只一人坂道を登って来て、七人の娘の背後に立っている娘がある。

第八の娘である。

背は七人の娘より高い。十四五になっ
ているのである。
う。

黄金色の髪を黒いリボンで結んでいる。

琥珀こはくのような顔から、サントオレアの花のような青い
目が覗のぞいている。永遠の驚を以もつて自然を覗のぞいている。

唇だけがほのかに赤い。

黒の縁へりを取った鼠色の洋服を着ている。

東洋で生れた西洋人の子か。それとも相あいの子こか。

第八の娘は裳ものかくしから杯を出した。

小さい杯である。

どこの陶器か。火の坑あなから流れ出た熔巖ようがんの冷めさたような色をしている。

七人の娘は飲んでしまった。杯を漬つけた迹あとのコンサントリックな圈わが泉の面に消えた。

凸面をなして、盛り上げたようになってる泉の面に消えた。

第八の娘は、藍染の湯帷子の袖と袖との間をわけて、

井桁の傍に進み寄った。

七人の娘は、この時始めてこの平和の破壊者のあるのを知った。

そしてその琥珀いろの手に持っている、黒ずんだ、小さい杯を見た。

思い掛けない事である。

七つの濃い紅の唇は開いたままでことば詞がない。

蝉はじいじいと鳴いている。

良久やしい間、只蝉の音がするばかりであった。

一人の娘がようようの事でこう云った。

「お前さんも飲むの」

声は訝いぶかりに少しの嗔いかりを帯びていた。

第八の娘は黙って頷うなずいた。

今一人の娘がこう云った。

「お前さんの杯は妙な杯ね。一寸ちよつと拝見」

声は訝に少しの侮あなどりを帯びていた。

第八の娘は黙って、その熔巖の色をした杯を出した。

小さい杯は琥珀いろの手の、臆けんばかりから出来ている

ような指を離れて、薄紅のむっくりした、一つの手から

他の手に渡った。

「まあ、変にくすんだ色なこと」

「これでも瀬戸物でしょうか」

「石じゃあないの」

「火事場の灰の中から拾って来たような物なのね」

「墓の中から掘り出したようだわ」

「墓の中は好かったね」

七つの喉のどから銀の鈴を振るような笑声が出た。

第八の娘は両臂りょうひじを自然の重みで垂れて、サントオレ

アの花のような目は只じいっと空くうを見ている。

一人の娘が又こう云った。

「馬鹿に小さいのね」

今一人が云った。

「そうね。こんな物じゃあ飲まれはしないわ」

今一人が云った。

「あたいのを借かそうかしら」

あわれみ 愍あの声である。

そして自然の銘のある、耀く銀の、大きな杯を、第八の娘の前に出した。

第八の娘の、今まで結んでいた唇が、この時始て開かれた。

モン ヴェエエル ネエ パ グラン メエ ジュ ボア
 "MON. VERRE. NEST. PAS. GRAND. MAIS. JE. BOIS.
ダン MON. VERRE"
 DANS. MON. VERRE"

沈んだ、しかも鋭い声であつた。

「わたくしの杯は大きくはございません。それでもわたくしはわたくしの杯でいただきます」と云つたのである。

七人の娘は可哀らしい、黒い瞳ひとみで顔を見合つた。

言語が通ぜないのである。

第八の娘の両臂は自然の重みで垂れている。

言語は通ぜないでも好いい。

第八の娘の態度は第八の娘の意志を表白して、誤解す

べき余地を留めない。

一人の娘は銀の杯を引っ込めた。

自然の銘のある、耀く銀の、大きな杯を引っ込めた。

今一人の娘は黒い杯を返した。

火の坑から湧き出た熔巖の冷めたような色をした、黒ずんだ、小さい杯を返した。

第八の娘は徐かに数滴の泉を汲んで、ほのかに赤い唇を潤した。

日本文学電子図書館

山椒大夫・高瀬舟

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館